

論文要旨

「ニコラ・フレレの歴史論—啓蒙思想における蓋然知としての歴史—」

SD161012 高橋 駿仁

序章

第一章 フレレと碑文・文芸アカデミー

第一節 フレレの生涯

第二節 碑文・文芸アカデミーという組織

第三節 碑文・文芸アカデミーにおける宗教の問題

第二章 フレレ以前の歴史研究

第一節 歴史への懐疑

第二節 『ポール・ロワイヤル論理学』における歴史研究の方法

第三節 ピエール・ベールの歴史批評

第四節 歴史研究と神話研究

第三章 フレレの方法

第一節 体系の精神から哲学的精神へ

第二節 歴史独自の蓋然性

第三節 蓋然的なるものへの眼差し：神異、神話

第四章 宗教による歴史の歪曲

第一節 託宣の実践

第二節 ノアの洪水の普遍性

第三節 キュロスについての言説をめぐって

第四節 『トラシュブロスからレウキッペへの手紙』における宗教批判

第五章 フレレの年代学

第一節 ニュートン年代学への批判

第二節 中国年代学とキリスト教

第六章 フレレにおける異教とその神話

第一節 ギリシアの世界観と歴史性

第二節 ガリア人の宗教

終章

参考文献一覧

啓蒙思想はこれまでさまざまな特徴を付与され、それが批判されてきたが、その特徴の一つとして理性主義がある。フランスではデカルト以降理性を重視する傾向が生まれ、フィロゾーフ（啓蒙思想家）たちもそれを重んじていたのはまちがいない。このような理性主義に対しては当時から現代にいたるまで、批判がなされている。この種の批判者は、啓蒙が合理的でないものを徹底的に排除していると考えているが、啓蒙は本当にそのような思想として考えられるべきなのか、これが本論文の出発点である。そこで本論文では、合理／不合理という二項対立からあふれてしまうものとして、蓋然的なるものを扱った。とりわけ啓蒙期における〈歴史〉に着目し、この蓋然知たる歴史がどのように扱われていたのかを検討した。当時の〈歴史〉を研究するにあたり、本論文が注目したのはニコラ・フレレ（Nicolas Fréret, 1688-1749）であった。歴史研究の専門機関である碑文・文芸アカデミーに所属していたフレレは、それまでの歴史研究を批判し、近代的歴史学に非常に近い形で歴史研究の方法論を提示し、歴史研究を遂行していた。また彼はさまざまな他のアカデミー会員たちと論争を行っており、フレレを中心に当時の〈歴史〉をめぐる状況を描き出すことで、本論文は啓蒙を「理性主義」と判断するだけでは理解することができない別の側面を浮かび上がらせようと試みた。

第一章においては、フレレの生涯と彼が所属した碑文・文芸アカデミーという組織について紹介した。フレレも碑文アカデミーも研究蓄積が少ないため、フレレがどのような人生を送ったのかということ、そして碑文アカデミーとはどのような組織なのかということを示すことは必要である。第一節ではフレレの生涯を扱った。フレレはその生涯のほとんどをパリで過ごし、26歳に碑文アカデミーの会員となってからは、ただひたすらに自身の研究に没頭していた。このような彼の研究スタイルだからこそ、本論文で示すような彼の思想が生まれたのだと言うことができよう。第二節では碑文アカデミーという組織について、その歴史と組織としてのありかたを紹介した。碑文アカデミーは元々ルイ14世のためのプロパガンダ機関のような位置づけだったが、1715年にルイ14世が亡くなった後は、純粋な歴史研究の機関として生まれ変わり、会員たちは比較的自由的な歴史研究ができていた。そこで会員たちは自らテーマを選択し、毎週開かれる会合で研究発表をし、それが『碑文・文芸アカデミー論文集』という形で活字化された。第三節では碑文アカデミーにおける宗教の問題を考えた。碑文アカデミーでは特定の修道院に属する正規の修道士は、事実上会員としてアカデミーで活動することはできなかった。ただし、実際にはかなりの数の聖職者がアカデミー会員となっており、ただ聖職禄を保有しているだけの在俗の聖職者であれば、活動を許されていた。アカデミーでは明確に神学的性格をもった研究は認められていなかったが、そのような制限の中でも会員たちは、自分の関心に基づいてテーマを選択し研究を行っていた。そして、フレレはときにキリスト教への批判とともれる論文を発表していたという点で特異な存在であった。

第二章においては、フレレ以前の歴史研究について扱った。フレレは彼以前の歴史研究に批判的だったがゆえに、自分なりの歴史研究の方法を提示することになるが、彼の方法論を

理解するためにもその批判の対象を理解しておくことが必要である。第一節ではデカルトからはじめ、歴史に対して懐疑的な思想をとりあげた。デカルトは歴史の蓋然性を批判し、マルブランシュは古代学者の骨董趣味を批判し、リベルタンたちは情念や偏見によって歴史が歪められてしまうがために歴史を批判していた。第二節では『ポール・ロワイヤル論理学』における歴史研究の方法を検討した。歴史に対して懐疑の目が向けられると、聖書に記される物語にも危険が及ぶ。そのため、キリスト教側で歴史研究の方法を考えて、歴史研究を正当化しようという動きが見られるようになった。『ポール・ロワイヤル論理学』では、歴史的真理と数学的真理が分けられ、歴史的真理も確実性をもちうるということが述べられたが、この方法論が提示された目的は護教論的なものであり、歴史研究はいまだその範疇から出ていなかった。第三節ではピエール・ベールの歴史批評を扱った。とりわけ彼が『歴史批評辞典』を出版する前に公開した『批評辞典腹案』を分析し、『辞典』を編むベールの意図を確認した。フレレはベールをピュロン主義者の代表のような人物として扱っているが、実際にはベールはピュロン主義者などではなく、歴史の確実性を信じて批判的検討をした人物であった。第四節においては当時の歴史研究と神話研究の関係について考えた。当時の歴史研究は神話研究を同時に含んでいたとすることができる。当時はエウヘメロス主義という、神話の歴史的解釈法が流行していた。アカデミー会員であるアントワーヌ・バニエはエウヘメロス主義を体系化した人物だが、バニエは神話にさまざまな意味があることを理解し、すべての神話を歴史的に解釈することには反対していた。フォントネルはバニエとはちがう方向から神話と歴史を接近させていた。フォントネルにとって神話とは最初の歴史であり、なおかつ神話や歴史を見ることで我々が人間精神の進歩について理解ができるという独創的な考えをうち出した。

第三章においては、フレレの方法を分析した。第一節および第二節では、フレレの『古代史研究およびその証拠の確実性の度合いについての考察』という論文において、彼が提示した自らの歴史研究の方法を検討した。フレレによればそれまでの歴史家たちは「体系の精神」に支配され、体系を構築するようにして歴史を理解しようとしていたが、人間精神には限界があり歴史の完全な体系を形成することは不可能である。フレレはこの「体系の精神」に「哲学的精神」を対置し、不完全な演繹に頼るのではなく、徹底的な史料分析によって歴史を再構成することを提案した。このような方法でもって、フレレは歴史を分析していくが、確実性が不十分とされる伝承や神話の類も彼の研究対象であった。それはこの種の語りにも、真実が内包されていることが往々にしてあるからだ。理性に照らして歴史を見たときに、その表面にある不合理なものに騙されることなく、その奥に隠されている真実をつきとめようとするところこそ、フレレが目指す歴史家のあるべき姿であった。また、歴史はそれ独自の蓋然性をもっているのもあって、その蓋然的なものを研究するのに、他の学問の手法をもちこむことは、フレレには許容できなかった。フレレは幾何学や神学といった学問からは独立した分野としての歴史研究を目指したのだ。第三節ではフレレが神異や神話といった虚偽性の高いと考えられているものをどのように理解していたかを検討した。フレレにとって歴

史において語られる神異は、多くの場合ただの自然現象が誇張されて表現されたものだった。すなわち、その誇張された部分を取り除けば、真実が見えてくるということになるため、神異もまた歴史研究の対象ということになる。神話に関しては、フレレはエウヘメロス主義的神話解釈を批判している。すべてを歴史に還元してしまうような方法を神話解釈として適切ではない。それでもやはり、神話には歴史が含まれている可能性があるため、フレレは神話研究の価値も十分に認めていると言える。

第四章においては、宗教、とりわけキリスト教による歴史の歪曲について扱った。フレレはキリスト教がなす歴史の歪曲に対して、きわめて強い反発を示している。第一節では託宣の実践に関するフレレの論考を扱った。フレレはギリシアの託宣を問題とし、そのような実践がたしかにあったということに着目する。そしてその実践がオリエントの集団からもたらされたものだとしたうえで、聖書の注釈者たちに批判を加える。彼らは託宣のような迷信的な実践と神の単一性および霊性への信仰とが共存している事態を避けたかったがために、聖書でも明らかに確認できる託宣の実践の存在を認めようとしなかった。それはフレレにとっては歴史の歪曲に他ならないのであった。第二節ではフレレが行なった、ノアの洪水とギリシア神話における洪水の比較について考察した。護教論者たちは聖書の唯一性とノアの洪水の普遍性を確保するためにこの二つの洪水を同定しようとしたが、フレレはそれを否定した。ギリシアの洪水はノアの洪水の変種ではないということを証明することによって、結果としてフレレはノアの洪水の普遍性を否定するという大胆な主張を行なったのであった。第三節ではキュロスについての言説をめぐる議論を追った。キュロスの物語については、歴史的にヘロドトスとクセノポンのどちらが正しいのかが議論されてきたが、教会はクセノポンのほうに聖書との一致を見て、そちらを支持した。フレレは史料を綿密に検討したうえで、クセノポンの『キュロスの教育』を「歴史小説」とみなした。そして注釈者たちが考える聖書とクセノポンとの一致について、根拠薄弱だとして拒絶するという宣言をしたのであった。第四節ではフレレ著とされる地下文書『トラシュブロスからレウキッペへの手紙』における宗教批判を検討した。この著作で、フレレは痛烈な宗教批判を展開している。そこでは、理性によって宗教を判断することが提案され、現存するあらゆる宗教は理性に反しているとされる。それは宗教が体系化され組織化されることによって、少数の権威者が自らが信じる教義を他者に広めようとしていたからである。フレレは無神論ともとられかねない語り口によって宗教を批判しているが、そのような彼の態度をアカデミシアンとしてのフレレに対して適用すべきではない。なぜなら、アカデミシアンとしてのフレレにとって宗教批判は二の次であり、そして宗教もまた歴史を知るための貴重な史料だからである。

第五章においては、フレレの年代学を扱った。第一節ではニュートンとの論争をとりあげた。ニュートンは伝統的な年代学を覆して非常に大胆で新しい考えをうち出したが、その結果起こっていたのはギリシアやエジプトの歴史の大幅な短縮であった。そしてそれはユダヤ・キリスト教の歴史の古さを確保することにつながっていたのだ。フレレはさまざまな文

献から証拠をもちだして、このニュートンが示す新しい年代記述を完全に否定した。第二節では中国の年代学の問題を扱った。フレレは一部のイエズス会士たちが採用していたフィギュリズムを批判した。彼らは聖書の物語の印を中国の古文書にむりやり見いだそうとした。フレレはこのような同化を批判するが、一方で中国と聖書の年代記述の調停を試みてもいた。聖書もまた我々に歴史を教えてくれる貴重な史料なのであり、それをうまく利用して歴史を理解できるのであればフレレはそのようにする。聖書の歴史も正しく、中国の歴史も正しいのであれば、二つの歴史はうまく調停できるはずであり、そのためにもフレレは七十人訳聖書の年代記述を採用してこの問題を解決しようとしたのであった。

第六章においては、異教およびその神話をフレレがどのように考えているのかを分析した。第一節では、ギリシアの宗教と神話についてのフレレの考えを検討した。当時は、異教の神話を聖書の物語の墮落や剽窃とみなす考え方があったが、フレレにとってギリシア神話はユダヤ・キリスト教とは無縁のものであった。例えばバックス神話をモーセと関連づけたギヨーム・ラ・ヴォールのように、根拠の乏しい主張に対しては批判的で、彼はバックス信仰がユダヤ・キリスト教とは関係がなく、エジプト起源だということを、さまざまな文献を用いて証明しようとしていたのであった。さらに、フレレはペレロポンの神話に歴史的な根拠があると考え、それを検討した。フレレはペレロポンが乗っていたペガソスの存在に着目して、航海術と結びつけてこの神話を解釈した。一見すると荒唐無稽である神話もフレレにとっては研究の対象であり、それに真剣に向き合っているフレレの態度は特筆に値する。第二節ではガリア人の宗教についての議論を追った。フレレはさまざまな異教に関心をもっていたが、その一つはガリア人の宗教であった。アカデミーでは、デュクロが発表した論文を契機として、ガリア人の宗教についての議論が盛り上がっていたが、デュクロはガリア人がもとは一神教徒であると主張し、フレレはそれに反発した。ガリア人が偶像崇拜をしていなかったことはフレレも認めるが、だからといって多神教徒でなかったと主張するのはむりがあると考えた。むりに異教を一神教にひきつけるような議論はフレレには許容できなかったのだ。

フレレはそれまでの歴史研究を批判し、近代的歴史学にきわめて近い形での歴史研究を目指した。彼の対象には歴史のみならず神話も含まれており、合理的でないものを排除するというような啓蒙理解では収まらないような特徴を彼が持っていることがわかる。そしてこのような特徴はフレレのみに限定されるものではなく、碑文・文芸アカデミーという組織全体に適用されるべきものであるため、蓋然的なものを研究するということはフレレ個人にのみあてはまるものではないのである。